

エイコス 50 年記念号の発刊にのぞんで テレビ映像を見ながら祈る

伊藤 洋

今年 2 月 24 日、突如としてロシアがウクライナへの侵攻を始めた。いま 4 月中旬だが、まだその「戦争」は止まらず続いている。ウクライナからの避難民をフランスは 3 月から受け入れ続けている。すでにその避難民の数はかなりの数になり、フランス国内の滞在先も増大していよう。

ウクライナ国はその民族や使用言語から言えばスラブ系と言えるだろうが、その隣国ルーマニアはラテン系だろう。筆者はルーマニアには数年前のシビウ国際演劇祭の折に行ったことがあるが、ウクライナには行ったことがない。

聞くところでは全く異なる国のようであるが、日本とウクライナは友好国で比較的仲の良い国の一つだろう。1967 年日本初演のミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』（原作ショーロム＝アレイヘム）は、帝政ロシア時代のウクライナの寒村アナテフカを舞台にしている。主役の牛乳屋テヴィエを森繁久弥（のちには西田敏行など）が主演して、大当たりし度々上演されたから、あの貧しい家族の物語を思い出す人も多いことだろう。あの中でもロシア人のユダヤ人追放令によって、テヴィエ一家が故郷を追われたのだった。

ところで筆者はルーマニアでは、シルヴィウ・プルカレーテ演出の『ルル』を見たが、魅力ある良い舞台だった。いずれにせよ、このロシア・ウクライナ両国とも、傾向は違うかもしれないが、民衆の間で演劇が盛んなようである。

テレビに映される映像から類推すると、ウクライナの主要都市はロシア軍の猛攻を受けて、人家が軒並み破壊されている。ウクライナの中年婦人は、自分の家が全壊したと泣いていた。テレビ報道によれば、市内のホテルも劇場もすべて破壊されたとのことで、その惨状が映されていた。ロシアは何を目指して、ウクライナ東部の街を破壊しつくそうとするのだろうか。一刻も早くこのロシアの侵攻を止めてほしいとテレビの前で祈っている。

補遺

野池 恵子

誕生 50 年の節目を迎えて『エイコス』記念号を編んでいる。半世紀前の 1972 年といえば浅間山荘事件が起り、沖縄が本土復帰を果たした年だ。その頃の学生たちは既成の体制に異議をとなくて、自分たちの意見を集会やデモ行進で公にし、新しい世界の到来を表現していた。伊藤先生もバリ 5 月革命の空気を存分に吸収して日本に帰国したところであった。閉塞感の強い現代となつてはやはり 50 年という時の隔たりは大きいだろう。

とはいえ絶やすことなく続けてきた活動の中から、新たな試みが二つ誕生した。今号で初めて翻訳の分野に挑戦し、キノーの『芝居じゃない芝居』を5人で訳した。また「研究の広場」という新しい発表の場を設けて、研究に関して気軽に書ける機会を提供した。『エイコス』という広場に往来する何かは他の何かを触発してくれることを願ってである。

ところがこうしてエイコスが次のステップを踏み出そうとしたところ、ロシアのウクライナ侵攻が始まってしまった。原稿のやりとりをする毎日のテレビに荒廃していくウクライナの映像が映しだされる。まさかの50年目である。まもなく侵攻から三ヶ月がたち記念号の校正が始まろうというのに、ウクライナではいまだ爆撃が続いている。人々が殺され、人々が築いてきた生活が、建物が、そして芸術が消えていく。演劇もオペラも音楽もこの国からとり去られた。ロシアからも心ある人々が国外に逃げだしているのだろう、芸術も打撃をうけているにちがいない。ロシア演劇は、フランス17世紀のモリエールやラシーヌらの影響のもとでその基礎が築かれたという。そして日本でもおなじみの『桜の園』のチエホフの国でもあるロシア、劇場を数多く有するロシアの演劇はいったいどうになってしまうのか。勝手な戦争で、自国の演劇までも根絶やしにするつもりか、私たちはただ見つめるだけしかできないのか。そういえば17世紀文学もルイ14世の時代の戦火のなかではぐくまれてきた。詩人たちは筆をとり、役者たちは舞台にたった。何を感じ、考え、そして表現したのだろうか。遠回りと思えても、私たちはテキストを地道に読んで、彼ら／彼女らが仮構した世界そのものへの信の一端でも明らかにできればとあらためて思う。